美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開 (シ04)

研究組織　安永拓世、江村知子、二神葉子、橘川英規、小野真由美、米沢玲、小山田智寛、吉田暁子、田代裕一朗、黒﨑夏央、大谷優紀（以上、文化財情報資料部）、早川泰弘（副所長）、塩谷純（上席研究員）、倉島玲央（保存科学研究センター）、小林公治（特任研究員）

目　　的　絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

成　　果

1．隣接諸分野と連携した多角的調査・研究

- 和泉市久保惣記念美術館において「山崎架橋図」と「青磁鳳凰耳花生　銘「万声」」の撮影を行い、光学的調査を実施した（8月24～26日）。
- 香川県・丸亀市の妙法寺との共同研究で、現在損傷のある与謝蕪村筆「寒山拾得図襖絵」を、当研究所が所蔵する昭和30年代のモノクロ写真を利用して復原し、復原襖の奉安と撮影を行い（11月22日）、報告書を刊行した。なお復原襖が公開されるにあたり、瀬戸内海放送やNHK高松放送局にも取材され、その模様が放映された。
- 東京国立博物館との共同研究で、当研究所保存科学センターや無形文化遺産部と協力し、マイクロスコープを用いて画絹の糸の太さや本数、断面形状などを計測し、地域や時代による傾向を抽出した（8月9～10日、1月12～13日で、計14件の作品を調査）。また、東京国立博物館研究情報アーカイブズでのデータ公開について協議した。

2．研究成果の公開と蓄積データの機能拡張・相互連携

- 日本の美術工芸に関する研究会を4回行った（4月15日、5月30日、9月15日、11月28日）。
- 売立目録デジタルアーカイブの連携協力に関する打合せを行い、今後、各機関が所蔵する売立目録について、情報共有や相互連携の可能性を協議した（8月23日セインズベリー日本藝術研究所・立命館大学、12月1日西尾市岩瀬文庫）。
- 美術史研究のためのコンテンツ（日本美術史年紀資料集成）作成として、平成30年以降の展覧会図録から年紀のある作品の資料を順次収集して入力し、令和4年度の入力件数は592件に達した。

論　文

- 米沢玲・安永拓世：「光明寺所蔵羅漢図について―重層的な作品理解を目指して―」『美術研究』437　pp.1-29　22.8
- 安永拓世：「徳川頼宣の「初陣具足」と「江雪左文字」―家康が託した思いとともに―」『福山城築城400年記念協賛事業 特別展 名刀 江雪左文字―江雪斎、家康、頼宣が愛した刀の物語―』 ふくやま美術館　pp.85-90　23.2
- 安永拓世：「与謝蕪村筆「寒山拾得図」（妙法寺蔵）再考」『妙法寺蔵 与謝蕪村筆 寒山拾得図 共同研究報告書』 pp.148-157　23.3

発　表

- 早川泰弘・近藤壮氏（共立女子大学文芸学部准教授）・安永拓世：「桑山玉洲と岩瀬広隆の絵具・絵画作品における彩色材料分析と絵画表現」令和4年度第5回文化財情報資料部研究会　22.9.15
- 安永拓世：「呉春筆「白梅図屏風」と絵画の特殊な基底材（芭蕉布・葛布・絹の繊維の同定）」文化ファッション研究機構講演会　文化服装学院　22.10.19
- 黒﨑夏央：「菩薩像における条帛の着用・非着用の問題について―薬師寺金堂薬師三尊像に関する考察の手がかりとして―」令和4年度第6回文化財情報資料部研究会　22.11.28

刊行物

- 『妙法寺蔵 与謝蕪村筆 寒山拾得図 共同研究報告書』 東京文化財研究所　23.3

和泉市久保惣記念美術館での調査・撮影

『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 国宝 絹本著色 春日権現験記絵 巻十三・巻十四 光学調査報告書』

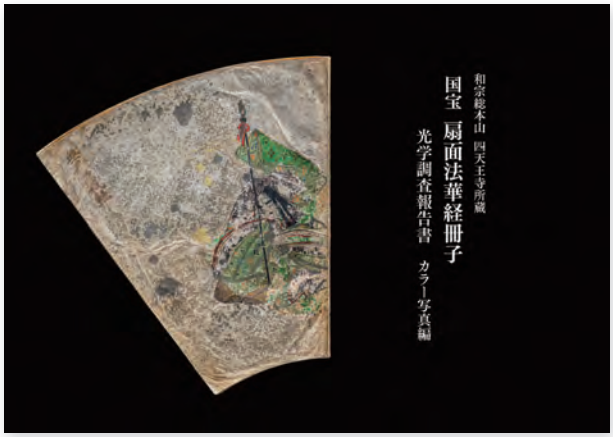
東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で実施する、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻の光学調査のうち、巻十三・巻十四に関する報告書である。さまざまな光源での撮影や蛍光X線分析による材料や技法に関する調査結果のほか、作品解説、座臥具に関する論考を掲載した。2022年9月刊行、232ページ。

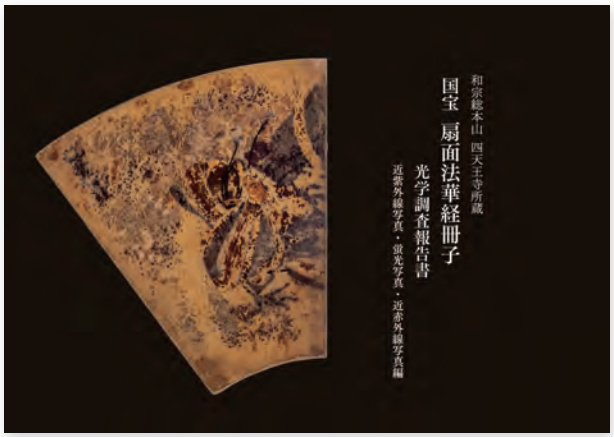
(④シ05の一環として刊行)

『和宗総本山 四天王寺所蔵 国宝 扇面法華経冊子 光学調査報告書 カラー写真編』

扇面法華経冊子は平安時代を代表する装飾経で、四天王寺には現存する六帖のうち五帖が所蔵される。本報告書には、2022(令和4)年の聖徳太子千四百年御聖忌にあたり、記念事業の一環として実施された「扇面法華経冊子」の光学調査の成果のうちカラー写真を掲載するとともに、作品解説、服飾表現に関する論考を掲載した。2022年11月刊行、320ページ。

(④シ05の一環として刊行)





『和宗総本山 四天王寺所蔵 国宝 扇面法華経冊子 光学調査報告書 近紫外線写真・蛍光写真・近赤外線写真編』

扇面法華経冊子は平安時代を代表する装飾経で、四天王寺には現存する六帖のうち五帖が所蔵される。本報告書には、2022(令和4)年の聖徳太子千四百年御聖忌にあたり、記念事業の一環として実施された「扇面法華経冊子」の光学調査の成果のうち近紫外線写真・蛍光写真・近赤外線写真及びそれらの写真によってとらえた情報に関する考察を掲載した。2023年1月刊行、216ページ。

(④シ05の一環として刊行)

『妙法寺蔵　与謝蕪村筆　寒山拾得図　共同研究報告書』

香川県丸亀市の妙法寺に所蔵される与謝蕪村筆「寒山拾得図」(重要文化財)は、1968(昭和43)年に損傷を受けたが、このたび1959(昭和34)年に東京文化財研究所が撮影したモノクロ画像と最新の高精細デジタル画像を用いて損傷前の復原襖を制作し、妙法寺と共同研究をおこなった。本書は、その共同研究の成果報告で、「寒山拾得図」のほか、妙法寺所蔵の蕪村作品群の高精細カラー画像や近赤外線画像を掲載する。2023年3月刊行、160ページ。

(①シ04の一環として刊行)